

遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を受けるのですか」と言うと、ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を受けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」 -ヨハネ1章-

## 神にあって喜び踊る

“暗闇に光をもたらし、悲しみを喜びに変えてくださる神。”

主の降誕を間近に控えた待降節「喜びの第3主日」になると思い出します。

時計が夕方5時を回ると「お母さんが帰ってくる！」と、幼い弟と妹と門口まで出て待っていた懐かしい子ども時代を。

自転車に乗って帰ってきた母を迎えて家に入ると、薄暗かった部屋が急に明るくなり、心細かった心は嬉しさ変わったのを。

バビロン捕囚から祖国に帰還した民を迎えたのは、神殿も街も廃墟と化した無の世界でした。それは、自分たちの生き方がもたらした結果を受け容れ、二度と過ちを犯さない、新たな生き方の再出発を意味していました。(阪神大震災を機に大阪教区が目指した「新生計画」は、この教訓をもとに「元に戻す復興」ではなく「新しい命で生まれ変わる」復興を謳ったのです。) 帰還した民を奮い立たせるためにイザヤが希望のメッセージを伝えてから、その実現を準備した荒れ野のヨハネまで、約500年の時が経っています。その500年の間、復興を目指した民の中に二つのグループがありました。

一つは、かつての為政者、律法主義を掲げる宗教のリーダーたち。もう一つは、神のみ心に、心砕かれたアナビム(旧約聖書で義人と言われた貧しい者)と呼ばれたごく少数のグループです。このアナビムから神は、  
救い主を準備するヨハネを遣わされ、  
真の復興は既成のリーダーたちではなく、このアナビム  
が示す路線であること  
とを示されたのです。



民は、神の人ヨハ  
この人こそ待望の  
す。しかしヨハネは  
ねのけて、来るべ  
向かわせます。ヨハ  
た神の人です。神の  
べて神に栄光を帰すの  
母を待つ子どもが、お母さん  
望みを置くのは神お一人です。神から生まれた(洗礼を受けた)子は、神だけが親であることを知り、他の何ものも、待っている自分の「闇の心」をいやすことは出来ない知っているから  
です。

ネの、厳しく力ある教えに、  
メシアだと思ふようになりま  
自分に向けられた称賛をは  
きメシア、イエスへと人々を  
ネは、「自分の使命」を心得  
人は、自分の栄光を求めず、す  
です。

だけを待ち続けるように、信仰者が

2020年12月13日 主任司祭 昌川 信雄